

# PR誌「月刊センター」の刊行

・創刊の目的 三宮センター街が町ぐるみ、更に新しい感覚と香り高い文化的雰囲気をつくりたいための媒体として創刊された。

・創刊号 昭和三十年一月一日

発行所を三宮センター街二丁目におく。

編集兼発行人 森崎有康 精文舎印刷、十

二頁で本文監刷。これと同年月日の創刊に

「銀座百点」があり、センターは商店街P

R誌の草分けである。

「センター」は、センター街のPR誌といながら全くの独立採算制で、有志がスポンサーとなり、一店が千五百円を負担して創刊されたもので、参加店は三十八店、その他の広告は表紙裏にセンター街が一頁、田路時計店とマルダイ卸店が二分の一頁ずつ、星電社が表紙四に一頁掲載されている。

センターは現在二百八十五号（十月号）を



祝辞をのべる宮崎市長と坂井知事

数えるが、創刊号から続いているスポンサーは、マルダイ、田路、視正堂、マミー、ベル、香月、長沢、ドキ手芸、マルナカ、おそめや、本多屋、大西、丸松、ファミリア、みどりや、ドンク、渡辺、スコッチ、山下履物舗、喜久屋、フタバヤ、三和商会（順不同）の二十二店である。

当時のセンター街はアーケードが出来て、町内組織も漸く確立し、街の繁栄も日毎に増していた時代ではあるが、新興商店街のことで、客寄せにうたえるような核店舗がなかった。

そこで宣伝小冊子を連合で作し、PRの媒体に利用したわけで、活字文化の必要性をいち早く感じて創刊されたことは、時流に目覚めた店主たちの、最もナウな経営感覚といえることが出来る。

2号は二月二十八日発行二十頁、発行人中島七郎、印刷は丸和印刷。3号休刊。4号は四月十五日発行、編集人中島七郎、発行人奥元敏治、5号名義人奥元敏治。

こうして担当者がめまぐるしく変更する原因は他にもあったかも知れないが、表面に現われたのは印刷費の支払いが遅延したこと、これを肩代りして支払った神港通信社へセンターの権利は移った。印刷費の未払い分は半年月賦で完済された。しかし経済的には好転せず、人件費の払えるような状態ではなかった。

そういう中で写真コンテストを行い、第一回応募は七十点、一位石田正彦氏（賞金五千円）で三十年八月十四日、センター会館で表彰式を行った。10号印刷は一進舎。第二回写真コンクールは三十一年六月、中尾悦次郎氏が一位入選（応募九六点）その後センター写真コンテストは恒例となった。

七月から愛港社印刷所へ変更、これで印刷会社を四社歩いたこととなる。

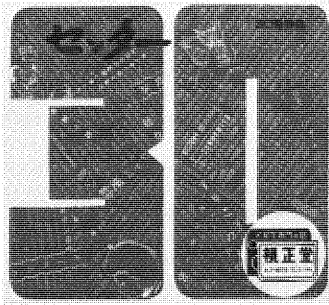
昭和三十三年正月には24号を発行、広告主は四十五店。この年は市庁舎の新築落成があって三宮は急に活気づき、センターも30号には二十四頁の特集を編む。

三十三年36号より発行人岩槻通行。六月五日第三種郵便物認可。三種郵便物の認可に際しては田路茂夫氏の並々ならぬ熱意とご尽力に負うところが大きい。これによってセンターは読者に対して教養面や文化の面で大いに役立つ有意義な本であることを認められたもので、出版物の権威も大いに高まり、同時に郵便料金が格安となり、購読を希望する読者サイドの負担を軽くすることが出来た。

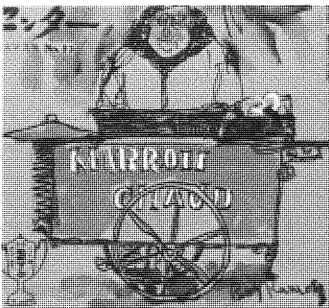
昭和三十五年68号より発行人渡辺徳治郎、編集人ほんじすまことなる。

昭和三十八年五月100号発行、そごうの好意により記念祝賀会とチャリティショウを行ない、六万三千二百四十円が集まったので、オルガン、図書などを求めて、再度山中にある精薄施設神戸学園に寄贈、この時は落語家桂小春団治師（現露乃五郎師匠）も同道して慰問をされた。このことが三宮センター街善意の会の先鞭となった。

昭和三十九年三月二十日、発行人渡辺氏が死去されたことから、後任の発行人として長沢氏、大内氏と就任を懇請したが、ご両氏共



▲30号特集(S 32.6.25発行)



▲No.83クリスマス号(S 36.12.1) 鴨居玲画伯作



に都合がつかず、行政氏の斡旋で漸く坂本正三氏が受諾、今日に至っている。

昭和四十年センターは創刊十周年を迎えた。五月七日、再びさう神戸店の好意により記念式典を開催、会場で記念事業として善意の会の発足を計って賛成を得、ボランティア活動を始めた。

昭和四十六年四月二十六日朝、尼崎印刷所へ出張校正中のデスクへ行政猛男氏の悲報がはいる。仕事をそのままにして枕許に駆けつけたが間に合わなかった。行政氏は創刊以来、センターの最もよき理解者、顧問格として常に公正な指導をされたお陰で、PR誌としての正道を歩むことが出来たと思う。その後任に山下良造氏を依頼して今日に至っている。

九月二十一日には、センター200号記念式典を、同じくさうで開催、行政氏の遺影をかかげて報告した。この時のアトラクションはさう店長室部長の浅井二郎氏の斡旋で、「石見神楽」を招聘、八岐大蛇(やまたのおろち)退治を演ずる神話の舞台は、幽玄且つ雄壮にして参会者の拍手を浴びた。

昭和五十年正月、創刊満二十年を迎えたので盛大な祝賀会を五月二十七日、四度びそこ

う大食堂で行った。今回も知事、市長、作家陳舜臣先生をはじめ来賓多数、三百余名が臨席、当夜は世界的バイオリンの名手、辻久子先生に特別演奏をお願いして、フロア・ショーの醍醐味を満喫して頂いた。

当夜は出席者より五百円の献金を頂き、その場で坂井知事さんに委託して善意銀行へ預託をした。

◇ ◇

月刊センターは理解ある有志と読者に支えられて十二頁のパンフレットから、現在は百二十頁〜百三十二頁の堂々たる本になった。町と人をつなぐパイプの役目を果たしてきたと自負しているが、一見その歩みは遅々として、言揚げする程のものでもないではないかとご批判の言葉も聞かれなくはない。

しかし、ただひたすら編集方針は一貫して変わることがなかった。その姿勢は「商店主がお客様へ差し上げる本であること」。広告主は三宮一円に限られ、夜間営業の軟派広告は掲載しないことであった。常に新しく、フレッシュな情報を亭主の立場で考え、作り、読んで頂くことであった。

出版文化は時代に抵抗しきれない場合が多い。そして時流に乗って面白おかしくこしら

◀No.264創刊22周年(S 52.1.1) 須田剋太画伯作



日新年懇親会で・本地編集長記

えることが、編集者は楽なのである。時にはエロもグロもポルノも流行った。そういうものを要求されたことも幾度かあったけれどもセンターは、常に茶の間の本でありたい信念をつらぬいた。広告はスマートで美しく、センターを参考にし、多くの同類誌が刊行された。

どこに置かれても、いつでも清潔で、手取りの味を持った本でありたい。それを愛して下さる読者とスポンサーに支えられて二十有余年生き続けてきたのだから。

そして、これからもその姿勢は変わることにはあるまい。(左は昭和四十八年一月二十九